

慶長使節と南蛮医学

山形 敞 一

まえがき

伊達政宗(一五六七—一六三六)⁽¹⁾が家臣支倉常長(一五七一—一六二二)とフランシスコ会神父 Luis Sotelo⁽²⁾(一五七四—一六二四)を使節として新イスパニヤとイスパニヤ經由でローマに派遣した慶長使節(一六一三—二〇)の事蹟については鎖国時代の日本では殆んど知られることがなかった。ところが、岩倉具視(一八二三—一八三三)を全権大使とする岩倉使節団(一八七一—七三)が明治六年(一八七三)五月二十九日威尼^{ヴェネツィア}西府古文書館で、天正使節(一五八二—九〇)の書翰五葉に混って、一六一五年(元和一)二月二十四日と一六一六年の日付で、支倉六右衛門長経と署名した二通の書翰を発見し、次いで⁽⁴⁾明治九年(一八七六)六月二十五日明治天皇奥羽御巡幸の際、仙台で開かれた博覧会に仙台評定所切支丹所に没収、保管されていた支倉常長の将来自品が出陳されてより、世人の注目を惹くことになった。

⁽⁵⁾伊達政宗は慶長六年(一六〇一)四月新しく造営した仙台城に入るや、城下町に五万二千人の市民を定住させ、商品の流通、統制を図り、領民には漆、桑、楮、竹、松、杉、桐などの植付を義務づけ、その伐採を許可制とした。

また、金、銀の採掘を奨励し、製鉄、製塩を創め、馬匹育成に努め、とくに新田の開墾に力をつくし、六十万石の仙台領は安政元年(一八五四)までに百三万石の禄高に達した。

さらに、政宗は北上川を改修して石巻港を整備し、買米制度によって買いつけた米を石巻に集め、江戸に廻米した量は

最高五十万石に達し、年間利益は約五万両にのぼり、藩収入の四〇%を占めるに至った。

徳川家康（一五四二—一六一六）は西日本とルソンとの貿易のほかに東日本と新イスパニヤとの通商を開こうと考えて、イギリス人航海士 William Adams（日本名三浦按針一五六四—一六二〇）の設計によって伊豆国伊東で建造させた日本船サン・ブエナヴェントゥーラ号で、マニラよりイスパニヤへ帰任の途日本に立ち寄ったフィリピン臨時総督ヴィヴェロ Rodrigo Vivero を送り届けながら田中勝介らを浦賀より、慶長十五年（一六一〇）六月十三日新イスパニヤに派遣した。しかるに、新イスパニヤ副王 (Visorei) のサルナス侯 ヴィラス マルケス de Salinas, Don Luis de Velasco は答礼大使に任命したヴィスカイノ Sebastian Vizcaino（一五五二—一六一五）に日本近海の金銀島探検隊司令官をも兼ねさせ、San Francisco 号に田中勝介らを乗せて、慶長十六年五月一日浦賀に入港した。

徳川家康の後を嗣いで将軍となった秀忠（一五七九—一六三二）も新イスパニヤとの通商を企図し、伊東で建造した日本船 San Sebastian 号をヴィスカイノの乗船とともに新イスパニヤに派遣しようとしたが、金銀島探検の使命を持つヴィスカイノに拒否された。止むを得ず、秀忠はヴィヴェロやヴィスカイノと謁見の時に通訳をつとめたソテロを正使に任命し、慶長十七年（一六二二）九月九日浦賀を出帆させたが港外で難破した。また、同年八月二十一日浦賀を出帆し、金銀島を探検しながら帰国の途についたヴィスカイノも暴風雨に遭い、同年十月十五日浦賀に帰港した。ここに、伊達政宗による慶長使節の計画が始まったのである。

伊達政宗と慶長使節

徳川家康・秀忠の企図していた東日本と新イスパニヤの通商交渉を継承したのは伊達政宗であるが、その導火線となつたのはソテロの献策である。

日本におけるキリスト教の布教は、天文十八年（一五四九）七月二十二日鹿兒島に上陸したシャヴィエル Francisco de

Xavier (一五〇六一五二) がイエズス会創立者の一人であった関係もあり、また一五八五年(天正12)一月二十八日法王グレゴリオ十三世が日本の伝道はイエズス会に限るといふ教書を發布したこともあって、イエズス会が中心となって行われた。

一五八二年(天正10)⁽⁶⁾巡察使ヴァリニヤノ Alexandro Valignano (一五三九—一六〇六)によれば、日本には十五万のキリシタンと二百の教会があり、京都と有馬にセミナリオが開かれていた。天正十五年(一五八七)豊臣秀吉(一五三六—九八)の禁教令にも拘らず、二十六聖人殉教の慶長元年(一五九六)にはキリシタン人口は三十万となり、家康が禁教令を發布した慶長十八年(一六二四)十二月十九日には日本の人口二千万のうち二百万人がキリシタンとなり、一四三人の神父がいた。

このような秀吉・家康の禁教令は、イエズス会と密着したポルトガル商人の市場独占の打破をも目的としており、ことに家康は東日本とルソンのイスパニヤ商人との通商を企図していた。慶長三年(一五九八)十一月九日フィリピン総督の使節として来日したフランシスコ会のヘロニモ神父 Jeronimo de Jesus を介して家康が通商交渉を開始するや、マニラに待機していたイスパニヤ系修道会の会員は使節に同行して来日するようになった。日本布教を悲願としてマニラに来ていたソテローは、慶長八年(一六〇三)七月フィリピン総督アクーニャ Pedro de Acuña の書翰を携えた前管区長ブレメオ Diego de Branco と同行して来日した。

⁽²⁾ソテローは慶長十一年(一六〇六)から翌年にかけて浅野幸長の和歌山城下で伝道を行ったのち、慶長十五年(一六一〇)江戸修道院長兼関東在住宣教師の遣外管区長となり、従来イエズス会の布教の行われていない東日本で、フランシスコ会の布教活動を開始した。ソテローが浅野幸長と親交を結んだのは、アンドレース神父が幸長の持病の疥癬を治したのが機縁となったものであり、さらに⁽⁷⁾ソテローが政宗と親交を結ぶようになったのも、慶長十五年(一六一〇)政宗の側室の難病を教会附属病院長ブルギーリス Pedro de Burguillos が治したのが機縁となった。

政宗は側室の難病がブルギーリヨス神父の投薬によって治ったにも拘らず、謝礼を受け取らぬソテローに感銘を受け、⁽⁸⁾
ヨーロッパ事情やキリスト教の教義について質疑を行った。

政宗はルソンを交渉相手とする家康、秀忠の意図を継承したが、新イスパニヤとイスパニヤを直接交渉相手にえらんだのはソテローとの質疑のうちに感得したものだ。このとき政宗とソテローとの間に介在したのがキリシタン武士後藤寿安（一五七六一六三六）である。後藤寿安は、すでに慶長使節に内定していた支倉常長の推挙によって政宗に仕えたのは慶長十六年（一六一一）九月ごろと考えられるが、常長の知行地の胆沢郡小山村（現胆沢町）に隣接する見分村（現水沢市）に知行地を与えられた。元和四年（一六一八）より小山村と見分村を灌漑する寿安堰の工事に着手したとき、その資金五十兩を用立てたのはキリシタン武士の草刈玄蕃、浅利主膳らと政宗の側室娼であるが、これはブルギーリヨスの投薬で難病の治った側室だったのであるまいか。

当時の南蛮医学は外科治療を主とし、内科治療については多くは漢方医学に準拠しており、⁽⁹⁾天正十二年（一五八四）入洛した司祭 Melchior de Figueredo は曲直瀬道三（一五〇七—一九四）に持病の診療を乞い、これが縁となって道三はキリスト教に改宗した。

したがって、日本に伝来した当初の南蛮流内科は精神的暗示療法が大部分であったと考えられるから、政宗の側室娼の難病は強度の心身症であったかもしれない。

伊達政宗がソテローと常長をローマに派遣した慶長使節（一六一三—二〇）の目的は、家康と秀忠の意図を継承して東日本と新イスパニヤとの貿易を行うことであつたが、日本・新イスパニヤ通商航海条約を締結するためにはイスパニヤ国王とローマ法王の諒解を得る必要があるとソテローに説得されて、使節を新イスパニヤだけでなく、イスパニヤとローマまで派遣することになった。

⁽¹⁰⁾慶長十八年（一六一三）九月四日付の伊達政宗書状が新イスパニヤ副王だけでなく、イスパニヤ国王、ローマ法王のほ

かに新イスパニヤのフランシスコ会総長直屬管区長、イスパニヤのフランシスコ会総長直屬インド管生長、ローマのフランシスコ会総長、セヴィリヤ市宛になっているのは、ソテロの指示に従ったものであろう。

政宗は⁽²⁾スカイノの部下の船匠や⁽¹⁾幕府船手奉行向井將監忠勝の部下の公儀御大工与十郎、水手頭鹿之助、城之助らの協力を得て、秋保刑部頼重、河東田縫殿親頭兩奉行の下に牡鹿郡月の浦（現石巻市）で建造した五百トン級のガレウタ・ナベッタすなわち小型ガレオン船サンファンパプチスタタ San Juan Bautista に常長とともに乗り込んだソテロは、フランシスコ会のイバーニョス神父 Diego Ibanez とくすスス神父 Ignacio de Jesus を⁽¹⁾れつ、新イスパニヤに向ったのは慶長十八年九月十五日（一六一三・一〇・二八）であった。

これが慶長使節で、一六一四年一月二十八日新イスパニヤのアカブルコ港に到着、同年三月メキシコで新イスパニヤ副王 Diego Fernandez de Cordoba, Marques de Guadalcazar に会見、同年十二月二十日イスパニヤの首都マドリッドに着き、翌年一月三十日国王ドン・フェリペ三世 Don Philippe Ⅲ に謁見、二月十八日常長は洗礼を受けて Don Philippus Franciscus Faxaura の名を与えられた。次いで一六一五年十月二十五日ローマに到着し、法王パオロ五世 Paolo V に謁見、同年十一月二十日常長は貴族に列し、パラチノ伯に任ぜられ、ローマの公民権を贈与され、法王より奥州にフランシスコ会の司教を置き、学林 (Collegio) を設立することの許可を得た。しかし、イスパニヤ並びに新イスパニヤとの間の通商航海条約の締結については新イスパニヤ副王、マニラ商人の意向を重視するインド顧問会議と枢密会議の反対、また司教設置についてはポルトガル政府とイエズス会の抗議のため交渉が進まず、最終的には慶長十九年（一六一四）三月徳川家康の発布した全国的な禁教令の強化によって失敗に終わった。

支倉常長はローマよりの帰途一六一六年（元和1）二月ジェノヴァで間歇熱に罹り、次いで同年六月セビリヤで刺絡を必要とする重病（肋膜炎でもあろうか）で臥床し、一六一七年（元和3）六月に至り、ソテロとともにイスパニヤを出国、翌四年（一六一八）三月新イスパニヤのアカブルコを出航し、同年七月マニラに到着した。約二年後常長はソテロをマニ

ラに残し、便船でマニラを出航し、長崎を経て仙台に帰ったのは元和六年（一六二〇）八月二十六日であった。政宗に帰国報告をした常長は直ちに知行地の胆沢郡小山村（現胆沢町）に静養し、元和八年（一六三二）七月一日五十二歳で病没した。重篤な感染症後の栄養失調症だったと考えられる。なお、ソテローは同年八月マニラより日本に潜入したが、長崎で捕えられ、大村宰に収容されたのち、寛永元年（一六二四）七月十二日火刑となった。五十一歳であった。

南蛮文化の奥州伝来

伊達政宗は六歳の時、快川和尚の高弟虎哉宗乙（一五三〇—一六一一）から漢字の手ほどきを受け、猪苗代兼如とその子兼与より連歌を学び、兼与から古今集の伝授を受ける程の文化人であった。

煙草は元来マニラのフランシスコ会修道院附属病院で薬品として用いられていたが、フィリピン総督の使節として再度来日したフランシスコ会のヘロニモ神父が慶長六年（一六〇一）七月二十七日伏見に病臥中の家康に煙草の種と煙草でつくった菓を献じたのが、わが国に流行するきっかけとなり、政宗は寛永十三年（一六三六）五月八日江戸で食道噴門癌による癌性腹膜炎で死亡するまで、最後の病床でも朝昼晩と三回は南蛮渡来のタバコを嗜んでいた。

最近改築された瑞鳳殿の発掘調査により、政宗の副葬品⁽¹³⁾としては、六五—七〇センチのキセル二本と梨子地煙管箱および携帶用日時計に混って黄金製ブローチ、銀製ペンダント、鉛筆などのヨーロッパ製品が発見されたことは、政宗の南蛮趣味が生涯つづいたことを物語っている。

政宗が南蛮文化に関心を持つようになったのは、慶長十五年（一六一〇）側室の難病が江戸のフランシスコ会修道院附属病院長ブルギーリオスの投薬で治癒したのが機縁となり、仙台領の布教を許されたソテローが翌年十月四日ヴィスカイ⁽²⁾ーノ及び三人の伝道士とともに仙台に着き、仙台城で政宗に公教要理を説いたのが始めである。ソテローは十月十五日より仙台城下の小寺院で布教を開始したが、これは遣欧使節に内定していた常長の推挙で、同年九月政宗に仕えたキリシタ

ン武士後藤寿安（一五七六一一六三八）の仙台屋敷だったと考えられる。⁽²⁾⁽⁷⁾ソテローは同年十一月三十日政宗の江戸屋敷に帰ったが、三人の伝道士はそのまま奥州に残り、仙台に二カ所（草刈^{クサヤ}、後藤^{ゴト}）、秋田、仙北、南部に各一カ所、計五カ所の教会を建立した。草刈⁽¹⁴⁾と後藤⁽¹⁵⁾は、元和三年（一六一七）十月十八日イエズス会のアンジエリス神父 Jeronimo de Angelis（二五六八一—一六二三）を介してイエズス会管区長ローコス Matheus de Courros を経てイエズス会ポルトガル管区代理者ピネロ Luis de Pinheiro に証文を送った仙台領貴理志談四百余名の筆頭署名者となった後藤寿安と草刈玄蕃平登路重長であろう。寿安は João, 平登路は Pedro で、仙台の小教会のクシヤは草刈玄蕃、ゴトは後藤寿安の仙台屋敷と考えられる。

寿安は常長の推挙で政宗に仕官したとはいえ、サンファンバプチスタ号の建造と遣欧使派遣についてソテローと意見を異にして対立し、慶長十九年（一六一四）十一月大坂冬の陣のうち大坂からアンジエリス神父を奥州に招いて布教させているから、有力なイエズス会系のクリシタン武士であったと考えられる。このことが原因して、アンジエリス神父がローマのイエズス会総本部に対して常長やソテローを中傷、誣告する記事を書く原動力になったと考えられる。

しかし、ソテローは江戸の牢から釈放されて慶長十八年（一六一三）八月仙台に到着し、月の浦から出帆するまでの約一カ月間イバーニエス神父 Diego Ibanez とともに仙台領の信徒に洗礼を行っていた。

ソテローはイバーニエス神父とヘスース神父 Ignacio de Jesus を伴って乗船するとき、江戸からフランシスコ会神父の仙台派遣を要請し、差しあたり慶長十六年（一六一一）十月江戸から仙台に伴った三人の伝道士に信者の伝道を任せていた。

しかるに、フランシスコ会からソテローの後任として仙台に着任したのは元和四年（一六一八）十月、マニラ残留のソテローの書翰と進物を政宗に届けに来たガルヴェス神父 Francisco Galves（一五七四—一六二三）である。次いで、元和六年（一六二〇）ガルヴェス神父が最上地方に転出したのちバラハス神父 Francisco Barajas（日本名フランシスコ孫石衛門）が仙

台に着任し、伝道に当たっていた。ガルヴェス神父は元和九年（一六二三）江戸に呼び還され、浅草癩療院で働いていたが、同年十二月火刑に処された。またバラハス神父は転宗したイエズス会神父ポロロ Jean Baptiste Porro（日本名寿安十太夫、半右衛門一五七六一一六四〇）の自白から寛永十六年（一六三九）十二月仙台の舟奉行中村重内屋敷内で捕えられ、翌年江戸で殉教した。

支倉常長は一六一五年（元和一）二月十七日マドリッドのフランシスコ会修道院でイスパニヤ国王 Don Philippe 三世とフランス王妃の臨御のもとに洗礼を受け、Don Philippus Franciscus Faxecura の教名を与えられ、次いで同年十一月二十日ローマ法王 Paolo 五世は常長とその子孫を法王の廷臣としてペラチノ伯に任じ、前例のない私の祈願所を設ける許可を与えている。その常長を棄教者としてローマのイエズス会本部に報告したのはアンジェリス神父で、⁽¹⁷⁾パジエス Leon Pags（一八一四—八六）ら多くの学者は常長の棄教説を支持している。しかし、⁽²⁾元和八年（一六二二）胆沢郡小山村（現胆沢町）で病没した常長の臨終には、マニラから常長に同行して来たデイエロ神父 Diego de San Francisco の命令で、政宗にソテロの書翰と進物を届けて布教を許されたガルヴェス神父が常長に臨終の秘蹟を授けたことをソテロに伝え、ソテロは一六二四年（元和十）一月二十日大村宰から法王に宛てた書翰で、常長の臨終を報告していることは常長を棄教者とするのはイエズス会の誣告であることを証明している。

このように、フランシスコ会の奥州布教はソテロ、ガルヴェス、バラハスによって続けられたのに対して、西日本を主力としたイエズス会の奥州布教はソテロに一步おくれた。しかし、慶長十九年（一六一四）六月津軽に流刑された京坂地方出身キリシタンの要請に応じて元和元年（一六一五）長崎から仙台に派遣されたアンジェリス神父は仙台領の著名なキリシタン武士後藤寿安や草苅支蕃らの協力を得て教勢を拡大し、元和三年（一六一七）日本人神父結城 Dicio Yonki、カルヴァリヨ神父 Diego de Carvalho（日本名長崎五郎右衛門一五七九—一六二四）、元和六年（一六二〇）アダミ神父 Giovanni Matteo Adami と日本人神父式見 Martino Chikimi が着任し、多数の信者に洗礼を与えた。⁽¹⁸⁾元和三年イエズ

ス会管区長コーロスに宛てた証文によれば、イエズス会の信者は、仙台では四百余人、黒川郡石積村、栗原郡一迫・三迫村では三百五十余人、胆沢郡見分村、磐井郡志津村、東磐井郡矢森村では四百五十余人、計千二百余人に達している。

わが国に布教したフランシスコ会はもとより、イエズス会でも、信者が多くなれば小教会を持ち、病院や施療所を併設していたから、後藤寿安や草苅玄蕃の仙台屋敷はもとより、見分村福原の寿安館を初めとして、これらの村々にも小教会や附属病院があったと考えてよいであろう。その例証の一つとして、元和三年十月のコーロス宛証文に署名した信者代表のなか、一迫村筆頭署名者の大谷石庵（靈名はうろ）、三迫村筆頭署名者の鈴木離庵、志津村次席署名者の千葉李庵はいずれも村医で、信者の中心人物であること、また、元和十年（一六二四）カルヴァリヨ神父が捕えられたとき、神父の宿をつとめていた三迫村の七十歳の老医ヨハネ安斉は妻アンナ、僕ルイス、親族アンドレア市右衛門とともに捕えられて殉教しており、村医安斉宅はイエズス会の小教会兼附属病院だったと考えられる。

さらに、伊達氏史料⁽¹⁶⁾によれば、密告によって捕えられたキリシタンのなかには医師が多く見られている。すなわち、寛永二十年（一六四三）沢辺村通町の外科医師左近、水沢大町の医師甚右衛門、元禄四年（一六九一）栗原郡岩ヶ崎村の医師甚兵衛、伊達安房守殿医師仲庵（亘理村）がキリシタンとして処刑されているが、これはフランシスコ会やイエズス会の救療活動とは無縁でないであろう。

杉田⁽¹⁹⁾玄白⁽²⁰⁾の『和蘭医事問答』によって知られた建部清庵（一七二一—八二）やその門弟の大槻玄沢（一七五七—一八二七）がこれらキリシタン医師の周辺から出現したことも偶然とは思いがたい。

慶長使節と南蛮文化

⁽⁹⁾ イエズス会はシャヴェリエル以来日本人の教育に熱意を持ち、ことに永禄三年（一五六〇）神父による医学教授と施術を禁じて以来、教育一辺倒となり、永禄四年トーレス神父 Cosme de Torres は豊後府内（現大分市）の教会に最初の初等学

校を開設して読書、音楽、作法などを教え、天正十一年（一五八三）には約二百校に達した。天正七年（一五七九）来日した巡察使ヴァリニヤーノは日本人神父養成のため翌年セミナリヨ Seminario を有馬に開設し、翌年安土にセミナリヨ、府内にコレッジ Collegio, 臼杵にノビシヤド Noviciad を設立した。セミナリヨは中等学校程度の神学予備校、ノビシヤドはイルマンとなり、コレッジヨに入るための大学予科的性格の修練院であり、コレッジヨは神学、哲学を中心とする司祭の養成機関で、新制大学に相当する。イエズス会のコレッジヨは天正十五年（一五八七）秀吉の禁教令のとき豊後府内から有馬領千々岩に移り、天正十八年有馬から加津佐、さらに二年後天草、次いで慶長三年（一五九八）長崎に移り、慶長十九年三月家康の禁教令により閉鎖された。

フランススコ会は創立以来治療に重点を置き、教会附属病院を設けていたが、ソテローは西日本に布教の重点を置くイエズス会に対抗して東日本に布教するにあたり、教育にも心を用い、奥州ことに仙台にコレッジオを設ける許可をローマ法王より得たのであった。すなわち一六一六年（元和²）一月八日付カルゼナル・ボルゲーゼの書翰では、「学林に関しては、彼地方に耶蘇会の管理する一校あり、法王その諸費を支給することは、日本使節の知れるところなるが故に、その地に於て之を可なりと認めなば、更に一校を新設し、之に年額三四千スクードを支給し、イスパニヤよりも、亦多少の給与をなすを可なりとす」と述べている。

しかし、慶長使節の目的とする通商航海条約や仙台学林設置は法王の許可を得たにも拘らず、インド顧問会議および秘密会議の奏議により見送られ、最終的には慶長十九年（一六一四）三月発布された家康の全国的な禁教令の強化によって失敗に帰した。

伊達政宗は常長が帰国した元和六年（一六二〇）九月より幕府に同調してキリシタン迫害を開始したが、⁽¹⁾支倉常長に対してはもとより、⁽¹⁸⁾後藤寿安に対しても、形式的な訊問にとどまり、むしろ放置していた形跡がある。たとえば寛永九年（一六三二）のキリシタン大検査でも転宗するものは全く放置する状態であった。

また横沢将監庸宣は元和二年(一六二六)八月二十日常長とソテロを迎えるため、サンファンバプチスタ号に乗船して堺を出発、翌年五月アカブルコ港に着き、メキシコで洗礼を受けてドン・アロンソ・ハシャルドの教名を受け、元和六年八月ルソン經由で常長とともに帰国した。しかし、帰国後は後藤寿安と並ぶイエズス会のキリシタン武士となり、元和七年(一六二二)八月十四日付でローマ法王の大赦に対する奉答文では寿安に次いで二番目に署名している。横沢将監はその後転宗して重用され、寛永二年(一六二五)寿安逃亡後の知行地の後始末をしている。

元和九年(一六二三)十二月七日政宗は江戸城で家光よりキリシタン禁制の強化を要望され、ついに後藤寿安を追放したが、転宗者ができるだけ保護していることは横沢将監の場合にみられるとおりである。

しかるに、元和六年(一六二〇)長崎に届いたパウロ五世の大赦を奥州のキリシタンに伝えたイエズス会のポルロ神父は、寛永十五年(一六三九)二月自首し、転宗後約一年で病死したが、その自首により、フランシスコ会のバラハス神父を始め、支倉常長ら慶長使節に関与した信者らの多くが検挙されるに至った。すなわち常長とともに新イスパニヤに渡った中条帯刀並びに神尾弥次右衛門、常長の従僕として南蛮に同行した勘右衛門、慶長十一年(一六〇六)以来仙台領の鉄吹方所が設けられた本吉郡馬籠村の肝入だった佐藤十郎左衛門佐渡並びに佐藤助右衛門、栗原郡三迫金成村銭吹き職人庄右衛門、胆沢郡見分村銭吹き職人小伝次らが密告により検挙された。しかし、中条帯刀佐種は転宗して、その子孫は仙台藩婦人科医員に登用され、また佐藤佐渡は常長に従って南蛮に渡ったが、転宗し、棟梁として馬籠村製鉄の中心人物となった。日光東照宮に政宗の献上した南蛮鉄灯籠は馬籠でつくられたものと考えられている。

とくに、ポルロ神父の自首で致命的な打撃を与えられたのはフランシスコ会の拠点であった支倉常長の遺族であった。すなわち、二男常道は逃亡、常長とともにローマに渡った勘右衛門のほか、常長の従僕与五右衛門夫妻、太郎右衛門夫妻、常頼養女しいなが信者として刑死し、常頼も信者として密告されたが、公式記録では家内取締不行届として寛永十七年(一六四〇)切腹を命ぜられ、六十貫余の支倉家は断絶した。もっとも、当時四歳だった常頼の妻子常信が二十二歳とな

った明暦四年（一六五八）勘気御免となり、寛文八年（一六六八）六月三日三十二歳の時五貫余の知行を与えられた。これは慶長使節を勤めた常長の功に酬いる仙台藩の配慮と考えるべきであろう。

仙台藩と南蛮医学

天文十八年（一五四九）シャヴィエルの来日以来イエズス会の布教が開始されるとともに医療もイエズス会の慈善事業の一つとしてとりあげられたが、とくに著明なのは弘治元年（一五五五）来日した Luis de Almeida⁽⁹⁾（一五二八—八四）で、弘治三年（一五五七）正月豊後府内（現大分市）の病院で診療を行ったのが国における病院の初めである。その後病人の増加により永禄二年（一五五九）七月内科病棟を新築し、従来内外科兼用の旧病棟は外科病棟としてアルメイダ自身が臨床教授を行ない、内科は日本人イルマンのパウロ教善、ミゲル、トマス内田らが引きつづき担当し、癩病棟も併設されていた。

しかし、永禄三年（一五六〇）イエズス会は神父による医学教授と施術を禁止する規則が伝達されたこと、また癩患者を見て入信した聖フランシスコ San Francisco d' Assisi（一一八一—一二二六）が一二〇九年創建したフランシスコ会の修道士がマニラから続々と来日してきたので、天正八年（一五八〇）以後には癩者のための病院が教会に附属して建てられた。すなわち、文禄二年（一五九三）パウテイスタ神父 Pedro Bautista⁽¹⁵⁾ が豊臣秀吉への使節としてルソンより来朝し布教に従ってからフランシスコ会の修道院には殆んどすべて癩病院が附設され、ことに慶長四年（一五九九）ヘロニモ神父が東国に布教を拡大したので、救癩を含む医療事業は大坂、長崎、京都だけでなく江戸にも及ぶようになり、政宗の側室がソテローの所管する江戸の修道院附属病院でブルギーリョスの治療を受けて治癒したことは前述のとおりである。

もつとも、慶長十二年（一六〇七）にはイエズス会も公式に江戸布教を開始し、フランシスコ会の浅草の癩病院に対して、イエズス会では品川に癩病院を開設したので、それ以後奥州の布教と救癩・医療事業は両会が拮抗して従事すること

になった。

前述のように、イエズス会のアルメイダやフランシスコ会のブルギーリオスの治療を受けた人々の間では、南蛮医学が漢方医学にまさることが認められるようになってきたが、わが国に南蛮医学として定着したのは、イエズス会神父 *Christovão Ferreira* (日本名沢野忠庵一五八〇—一六五〇) の伝えた南蛮流外科が嚆矢である。フェレイラ神父は慶長十五年(一六一〇)イエズス会の日本教区長として長崎に来たが、寛永十年(一六三三)背信して禅宗に帰依し、沢野忠庵と称して医療を行い、南蛮流外科秘伝書として流布したが、元禄九年(一六九六)阿蘭陀外科指南と改題して出版された。忠庵の門人には半田順庵、杉本忠恵、吉田安斉、西吉兵衛などが輩出して、忠庵流外科をひろめた。

一方、栗崎道喜(一五六六—一六四九)は天正二年(一五七四)九歳の時蕃船にてルソンに入り、十四歳のとき外科を志し、慶長年間三十余歳で帰国し、金創仕掛を著わし、栗崎流外科を創唱した。

寛文年間(一六六一—一七三)に至り、キリシタン取締が強化されるや、忠庵流や栗崎流の南蛮流外科は紅毛阿蘭陀流外科と称されるようになったが、長崎出島の蘭館医の伝えた阿蘭陀流外科の嚆矢は、慶安二年(一六四九)九月和蘭商館長ベール・フロクホーウコースとともに医官として長崎出島に着任し、同年十一月の江戸参府に随行したドイツ人医師 *Caspar Schamberger* である。カスバルの教えたカスバル流外科をわが国に伝承したのは長崎の和蘭通詞猪股伝兵衛である。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²³⁾⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾ 伝兵衛の嫡子伝四郎松順はカスバル直伝のカスバル流外科を学んで、天和三年(一六八三)伊達家に仕え、外科医員に採用されていゝ。

また、常長の随員の一人であった中条帯刀佐種⁽²¹⁾⁽²⁵⁾は南蛮医学ことに婦人科学を修めたが、密告によりキリシタンとして寛永二十年(一六四三)二月より正保元年(一六四四)八月まで江戸で入牢したが、寛永十二年(一六三五)以来棄教していることが認められ、釈放された。婦人科医員として仙台藩医員に採用された中条養喜は帯刀の子孫である。

伊達世臣家譜によると、勝田宋閑は寛永十三年(一六三六)南蛮阿蘭陀流外科を以て仙台藩医員となり、小川内玄琢は寛

文年間（一六六一—一七三）蘭医ヘムテレンヲヘイ及び西玄甫より南蛮阿蘭陀流外科を学び、また吉田意雲は京都の田中法眼意徳より南蛮流外科を学んで仙台藩医員に採用されている。さらに、勝田別家の勝田寿閑は延宝六年（一六七八）京都の長崎徳安よりカスバル流外科を学び、また、木村宗家の木村寿徳は寛政六年（一七九四）より三年間阿蘭陀通詞榎林重兵衛より榎林流外科を学び、同十年（一七九八）仙台北郊の七北田刑場で仙台藩における最初の解剖を行った。

とくに天明六年（一七八六）蘭学の泰斗大槻玄沢は仙台藩外科医員に採用され、さらに星松悦は文化十一年（一八一四）玄沢より阿蘭陀流外科を学び、西村理水は同十三年、次いで猪股松順は文政元年（一八一八）紀州の華岡青洲より華岡流外科を学んでいる。

仙台藩医員は百十八家あり、そのうち外科（瘍科）は十七家であるが、その殆んどすべて南蛮阿蘭陀流外科であったことは、慶長十五年（一六一〇）江戸で政宗の側室の難病がブルギーリヨスの治療によって治ったことから、政宗が南蛮医学の優秀性を認めていたためと考えられる。

文化十四年（一八一七）藩学養賢堂より分離造営された仙台藩医学校に、全国に魁けて文政五年（一八二二）三月蘭科が創設され、佐々木中沢（一七九〇—一八四六）を外科教授として招聘したのは外科医員の子弟の教育が目的であった。

このように、仙台藩医員には外科や婦人科に南蛮阿蘭陀流外科の多かったことは政宗以来南蛮医学尊重の仙台藩の方針によるものと考えられる。

むすび

伊達政宗（一五六七—一六三六）が家臣支倉常長（一五七一—一六二二）とフランシスコ会神父 Luis Sotelo（一五七四—一六二四）を新イスパニヤとイスパニヤ經由でローマに派遣した慶長使節（一六一三—二〇）は、東日本と新イスパニヤとの日本船による貿易を企図した徳川家康（一五四二—一六一六）と秀忠（一五七九—一六三二）の計画を継承したものである。

すなわち牡鹿郡月の浦で建造した五百トン級の小型ガレオン船 San Juan Bautista 号に乗船した常長とソテローは一六一三年（慶長18）十月二十八日月の浦を出港し、太平洋・大西洋を横断して、一六一五年（元和1）十月二十五日ローマに到着、Paolo Vに謁見、同年十一月二十日常長は貴族に列し、パラチノ伯に任ぜられ、ローマの公民権を与えられた。常長は法王より奥州にフランシスコ会の司教を置き、学林（College）を設立する許可を得たが、イスパニヤ並びに新イスパニヤとの間の通商航海条約の締結については新イスパニヤ副王、マニラ政庁の反対意向を重視したインド顧問会議と枢密会議の決議により見送られ、また司教設置についてはポルトガル政府とイエズス会の反対を受け、最終的には慶長十九年（一六一四）三月徳川家康の発布した全国的な禁教令の強化によって認可されなかった。

元和六年（一六二〇）九月二十三日マニラ經由で帰国した常長は知行地の胆沢郡小山村（現胆沢町）で元和八年（一六二二）七月一日五十二歳で病死し、また同年八月マニラより潜入したソテローは長崎で捕えられ、寛永元年（一六二四）七月十二日五十一歳で火刑にされ、慶長使節の使命は達成されなかった。

しかし、常長に同行した中条帯刀は南蛮医学ことに婦人科学を学び、子孫の中条養喜は仙台藩医員（婦人科）に採用され、また、佐藤佐渡は南蛮鉄製法を学び、鉄吹方所の棟梁として仙台藩製鉄の中心人物となった。

仙台藩で布教したソテローを始め、フランシスコ会とイエズス会の神父には医術の心得のあるものが多く、教会には附属病院が設けられ、仙台藩の医師にはキリシタンとなる者が多かった。

伊達政宗は慶長十五年（一六一〇）側室の難病をフランシスコ会の教会附属病院長 Pedro de Burgillos の投薬によって治ったのが機縁となってソテローと親交を結んだだけに南蛮文化ことに南蛮医学に関心を持ち、和蘭商館医員 Caspar Schlamberger よりカスバル流外科を学んだ猪股伝兵衛の嫡子松順を始め、仙台藩医員百十八家のうちの外科医員十七家はほとんどすべて南蛮阿蘭陀流外科であった。

文化十四年（一八一七）藩学養賢堂から分離造営された仙台藩医学校に、文政五年（一八二二）三月佐々木中沢（一七九〇—

一八四六)を外科教授として招聘し、全国に魁けて西洋医学講座を開設したのは当然のことと考えられる。

引用文献

- (1) 支倉常長伝 支倉常長顕彰会 昭50
- (2) ベアト・ルイス・ソテロー伝 ロレンソ・ペレス 昭43
- (3) 米欧回覧実記 久米邦武 昭55
- (4) 伊達政宗卿の南蛮遣使と使節支倉六右衛門 伊達政宗公顕彰会 昭13
- (5) 旧仙台藩治概要 明41
- (6) 南蛮文化渡来記 アルマンド・マルティンス・ジャネイラ 昭46
- (7) 伊達政宗記並使節紀行 シビオネ・アマチ 明34
- (8) 日本の医学 石原 明 昭34
- (9) 南蛮文化 海老沢有道 昭33
- (10) 大日本史料第十二編之十二 明42
- (11) 伊達政宗卿伝記史料 藩祖伊達政宗公顕彰会 昭13
- (12) 文化人伊達政宗について(ろうさいフォーラム) 山形敏一 昭57
- (13) 仙台郷土史の研究 伊東信雄 昭54
- (14) 東北切支丹史 浦川和三郎 昭32
- (15) 奥羽切支丹史 菅野義之助 昭49
- (16) みちのく切支丹 只野 淳 昭53
- (17) 慶長使節 松田毅一 昭49
- (18) 日本切支丹宗門史 レオン・パジェス 昭13
- (19) 仙台藩に於ける医学及蘭学の発達(仙台市史) 山形敏一 昭26
- (20) 建部清庵の医学(日本医史誌) 山形敏一 昭52
- (21) 切支丹の社会活動及南蛮医学 海老沢有道 昭19

- (22) 日本医学史 富士川游 明37
- (23) 仙合藩と独逸医学(日本医史誌) 山形敏一 昭16
- (24) 医史資料(富士川游著作集 10) 富士川游 昭57
- (25) 東藩日新医事略説 鈴木省三 大15

Keichō Mission and Early Christian Medicine

by

Shoichi YAMAGATA

Masamune Date's main purpose in sending Tsunenaga Hase (1574-1624) to Rome, Keichō Mission (1613-1620), was to negotiate a trade and navigation treaty, to set up a collegio similar to the Amakusa collegio of the Jesuits as well as to establish a Franciscan diocese in Sendai. Tsunenaga was given the title of count of Palatino by Pope Paul V and received Roman citizenship. Sotelo received permission to be a bishop. However the Spanish privy council advised the King of Spain to postpone the agreement and finally, because of the prohibition of Christianity by Ieyasu Tokugawa was strengthened, all the effort was in vain, except for Hasekura's title and citizenship.

Tatewaki Chujo went to New Spain as a subordinate of Hasekura and learned Gynecology. The descendant of Chujo, Yōki Chujo became a gynecologist of the Date clan. Sado Satō learned the western

way of iron manufacture and played the central role in iron manufacture in the Sendai clan.

Masamune's mistress was once treated by Pedro de Burguillos in 1610. Pedro was head of the associated hospital of a Franciscan church. This incidence connected Masamune and Sotelo, and Masamune became interested in western science especially in medicine. There were 118 houses of medicine in the Sendai clan and 17 of them were surgical staffs and almost all of these surgical staff member learned Dutch medicine.

Therefore it is easy to understand why in 1822 March Chūtaku Sasaki (1790-1846) was selected as the professor of surgery and chief of the Dutch Department to the medical school of the Sendai clan which was separated from Yokendo in 1817.